

近江国（滋賀県）の出身で、他国で活躍した商人を近江商人と呼びますが、その商売上手な近江商人が大切にしていた、「三方よし」という言葉をこぞ存じましょうか。「三方よし」とは、「売り手よし」、「買い手よし」、「世間よし」という商売を行ううえでこの理念を示している、売り手はもうかり、買い手は喜んで、社会的にも良い評判が得られてみんなが得をするということの意味しているのだそうです。近江商人が生まれた近江は、富山県や福井県と同じく浄土真宗の門戸が非常に多い土地柄で、商人たちは仏様に代わって、遠隔地で困っている人々に商品を届けに遣わされているという意識のもと、正直な商売に一生懸命に励んでいきました。

24（1644年）には、八幡（現在の近江八幡市）と薩摩・柳川（現在の彦根市）の商人が、京・大坂から米・古着・小間物などの日用品を買って蝦夷地で売りさばき、サケ・ニシンなどの海産物を仕入れて、京・大坂に販売するという「のこぎり商い」を展開し、巨利を得ていました。蝦夷地からの物資は、敦賀や小浜で陸揚げされ、人や馬の背に積まれて峠を越え、琵琶湖岸の港から湖上を舟で大津へ運び、ここで再び陸揚げして京都や大阪へ陸送するという、琵琶湖水運を利用して運ばれていました。

時代が進むと、漁場の場所請負人として漁業経営にも携わるようになっていきました。その代表格が八幡商人で

近江 真宗王国



近江商人の邸宅のひとつ、旧岡田弥三郎邸
—近江八幡市

ある、西川家です。初代・伝右衛門は、寛文年間（1661～1673年）に松前の城下に店舗を開設し、松前藩の御用商人となりました。松前藩の魚場の請負制度ができるのと、優良な魚場の場所請負人

となり、享保年間（1716～1736年）のころには、所有船舶が6艘をかぞえ、海運業と漁業者を兼ねる城下町有数の大店となりました。また、10代目の貞二郎（1858～1924年）は、北海道

「三方よし」の商人生む

での缶詰工場に着手するなど、祖先の北海道開発の事業の継承を行うと同時に、近代的企业活動を展開しました。このような大商人の中には、宗教的ともいえる境地に達していた人たちもいました。日野の豪商であった中井源左門が子孫のために書き残した家訓（「金持商人一枚起請文」）が有名です。これは、90歳の長寿を保ち最後まで店務にかかわった源左門が、生涯をかけて自らが体得した商売の極意をまとめたもので、「まずは儉約を第一とするならば自分一代では無理で、少なくとも三代は必要だ。これはもう神仏の加護がなければできない。また、世間様の協力がなければできない。だから、心の底から神仏を敬い、世間様にも尽くさなければならぬ。」と説いています。多くの近江商人たちは成功すると、早くに家業を息子や番頭に譲り、自分はお寺やお宮の世話をし、慈善事業にも力を注ぎました。（財団法人滋賀県文化財保護協会 田中咲子）